**蟲孕胎狂王女の獄苦悦**

～～王国を救うため、王女シャルリレーゼは邪悪な集団に我が身を差し出して全身で魔蟲を育み、発狂しながら国民の前で産み落とす～～　体験版

　アデルハイム王国は、世界でも珍しい「無神論」を国是とする国である。これは国の成り立ちに起因していた。

　人間にとって「神」という存在の重要性は、語る必要がないほど巨大であること、歴史を振り返れば明らかだ。

小さなことでは個人の心の拠り所から、大きなことでは文明の形成にいたるまで、「神」は人間の社会、文化、芸術、律法、戦争、果ては自然に対する解釈や死生観にいたるまで、人類文明に深く根を張り、多大な影響を及ぼしてきた。

　その「神」を、アデルハイムはなぜ否定するのか。

　それを語るには、時間を三〇〇〇年ほど遡らなければならない。当時は古代カロン文明末期、カロン帝国が世界の覇者として君臨していた時代である。

　古代カロン文明は、数多の神を信仰する多神教文明であった。

肉と金属の身体を持つ魔神デルアボート、千の腕を持ち雷の槍を放つ軍神ゾーゼイ、下半身が蜘蛛で上半身が蛇の蟲蛇神ポア、精気を吸われたミイラのような身体をしている死を司る神イッキニイク、身体は人間の女性だが頭部は男性器という異形神エソ、豊穣を司る巨大ナメクジに似た神カシなど、古代カロン文明では数多くの神が信仰されていたのだ。文明最盛期の帝国時代には、それら神々をモチーフにした人造の魔導生命体を生み出して、版図拡大の尖兵としていたほどである。

　この恐るべき「神の軍団」は、当時、侵略される国々に多大な恐怖をもたらして、人々の抵抗する意思を砕いたと伝えられている。なにせこの軍団に属する神々は、たった一体で数千の兵に匹敵するほどの力をもっており、特に魔神デルアボートや軍神ゾーゼイなどは一体で一国を滅ぼせるほど強力だったそうだ。

　帝国による世界征服完了後、役目を終えた「神の軍団」は解体され、神々はそれぞれ信仰する教団や宗派に譲られて「生き神」として祀られていたのだが、これら神々は、本物の厄災の前に、まったくの無力であった。

　帝国の最後は唐突だった。三〇〇〇年前のある夜、天空より巨大な隕石が降ってきて、帝都に衝突したのだ。巨大隕石の衝突によってカロンの帝都は蒸発し、衝撃波によって二〇億を超える人々が即死しただけでなく、半径数千キロメーストルを超える広大な領域が一夜にして死の大地と化してしまった。この大地は、現在、「暗黒の大地」と呼ばれ、強力な魔物や未知生物が跋扈する危険な世界となっている。

　古代カロン帝国滅亡からの千年間は、人類にとって最悪の暗黒時代であったと記録されている。隕石の衝突で舞い上がった大量の粉塵が太陽を覆い隠して気温が急低下し、植物は枯れ、作物も育たず、鳥獣や家畜のみならず魔物たちさえバタバタと餓死していった。

　生き残った人間たちも、飢えと寒さから逃れることはできず、ひもじい思いをしながら痩せ細って死んでいった。壮絶な飢餓感から人々は生きたまま餓鬼と化し、先に亡くなった者たちに群がって人肉を貪る有り様は、まさに地獄そのもの。親が死んだ子を喰らい、子がまだ生きている親を喰らう。そんな状況だから人心は荒廃して人々は生きるためならなんでもした。殺人や暴力が日常となり、奪うことが正義になって、弱き者は伸ばした手を踏みにじられながら死んでいった。法はもちろん、倫理も道徳も失われ、生きるためなら魔物と手を組んで同胞を殺戮する者さえいたのである。

　このような状況において、人々は神に救いを求めて祈り続けた。朝に夕に拝みに拝み、少ない食物を捧げ、時には乙女を贄として差し出したにも関わらず、神は降臨もしなければ再臨もせず、救いの手を差し伸べることもなければ天から慈味を降らすこともしなかった。結局、人間は、自分たちの力だけで生きていかなければならず、文明の再興は、神の奇跡によってではなく、人間たちの自力でなされたのであった。

　人類の危機に神という存在はまったく役に立たなかったが、それでも神という存在は、再興された人類文明においてその後も図々しく影響力を発揮し続けた。結局、人間は、なにかにすがらないと生きていけない弱い存在だったため、精神的支柱になりえる神という存在はまことに都合がよかったのである。

　だが、一部には、先のことから神の存在を否定する者たちもおり、彼らは「無神論」を掲げて、公然と神の存在を否定してはばからなかった。

　神を信じる有神論者と、それを否定する無神論者は、しばしば意見を対立させ衝突させてきた。だが、数で劣る彼ら無神論者たちは、常に劣勢に晒されて、敗北を強いられてきたのだった。

無神論者たちが時代を超え、国を超え、しばし差別や迫害の対象として虐げられてきたのは礫とした史実である。人間は、神の名を語る時、本性を剥きだしにして狂暴化するといわれているが、無神論者たちに対する弾圧は、まさにその典型だったといえるだろう。

　有神論者たちによる無神論者たちへの差別や迫害は酸鼻を極めた。

　無神論者たちは神を信じぬことを罪とされ、老若男女を問わず捕らわれた。捕まった彼らは拷問を受けた。殴られ、蹴られ、鞭で打たれ、焼き鏝を押しあてられ、歯を抜かれ、舌を切り取られ、爪を剥がされ、歯茎に針を突き刺され、生きたまま焼かれ、生きたまま埋められて、神への生け贄として生きたまま内臓を抉りとられた。千年を超える間に、何万人もの無神論者たちが殺されて、その一〇倍もの人々が、筆舌に尽くし難い辛酸を舐めながら生きてきたのである。

　だが、ある時、ひとりの人物が台頭したことで情勢は一変する。強い魔術の使い手であると同時に、文武に優れ、なおかつ人々を魅了するような美しさを兼ね備えたひとりの女性が立ち上がり、悲嘆に暮れる無神論者たちにむかって自分たちの国を興そうと訴えたのだ。

彼女の名はアデルハイムといった。のちに大国として屹立することになる国の名前の由来にもなった人物である。

「神の存在を信じぬ者たちよ、武器を持って立ち上がれ！　我ら無神論者たちが、差別され、迫害されてきた暗い時代に終止符を打つ刻がきたのだ。全ての神の像を打ち壊し、呪われた聖典を火にくべて、神のいない人による人のための人の国を建てようではないか！」

　女傑アデルハイムに率いられた無神論者たちの軍勢は、立ちはだかる敵をことごとく粉砕し、崇拝されていた神々を異次元の牢獄に封印しながら数多の宗教を討ち滅ぼし、周辺の国々を切り平らげていき、ついには自分たちの国を築くことに成功する。アデルハイム王国のこれが誕生であった。

　アデルハイム王国が建国されると、今度はその地に住んでいた有神論者たちが迫害される立場に追いやられた。アデルハイムは無神論を国是としたため、神を信じることは「悪」とされたからである。

　神を祀った神殿や祭殿が取り壊され、聖書や経典のみならず歴史書までもが火にくべられた。偶像は壊されて石くずにされ、黄金や白銀は溶かされて延べ棒にされた。抗議する者は多かったが、彼らはかつての無神論者たちと同じ目に遭わされて、数十万人が殺害され、数百万人が苦渋を舐める生活を強いられたのであった。

　特に激しい弾圧を受けたのが、古代カロンの神々を細々と信仰していた人々だった。彼らはカロンの神々を信仰するにあたって、昔の風習に倣い、人間を生け贄に捧げたり、魔物と性交に及ぶなどしていたため、特に強く嫌悪されていたからだ。

　捕らえられた彼らカロン信者たちは、深い洞窟へと連れて行かれ、生きたままそこに閉じ込められた。塞がれた洞窟の入り口からは、苦悶の声や呻き声、助けを求める声や慈悲を乞う声がしばらくのあいだ聞こえていたというが、やがて静かになった。洞窟の封鎖が解除されて立ち入ると、入り口付近には餓死した人たちが群がるようにして倒れており、その爪は、壁や床に深く食い込んでいたと伝えられている。

　神の存在の否定に対して、人々は当初、口には出さずとも、違和感をもって生活していたが、三世代も経てばそれが当たり前になってくる。むしろ神が降臨も再臨もなにもしてこなかったため、逆に無神論の正しさが証明される形となり、結果的に無神論は人々に受け入れられたのであった。

　その後アデルハイムは、さまざまな戦いを経て領土拡大を続けていくことになるのだが、その過程で数多くの宗教や信仰が歴史の彼方に消されていった。信徒の数がわずか数十人の土着の神から、国外でも信じられているほど有名な宗教にいたるまで、数え切れないほどたくさんの神や宗教が排除されていったのである。

　だが、アデルハイムの勢威が増すその裏で、信じる神を奪われた者たちの怒りと憎しみが蓄積していることに、国が気づくことはついになかった。

　そして、五〇〇年の月日が流れた･･････。

　　　　　＊

　建国から五〇〇年が経とうとしている現在、アデルハイムの情勢は極めて悪い。頻発する内乱と相次ぐ反乱によって国全体が混乱と混沌の混合物と化しているような有り様だった。

　ランバースとの戦争に負けたあと、アデルハイム国内で国民による激しい抗議活動がおこなわれたことについてはすでに述べたとおりである。最初はほんの小さな火種も、消火されずに五年もくすぶり続けていれば大火と化すものだ。アデルハイムの首脳陣が初期消火に失敗したと悟ったときにはもうなにもかもが手遅れだった。

　凄惨な母子殺害事件をきっかけとして、各地で不平を抱いていた民衆が武器を持って立ち上がり、そこに一部軍隊も加わって、鎮圧のために派遣された国軍と衝突して多数の死傷者が出る惨事が相次いだ。

北のフローレシア地方では総督府が焼き討ちに遭い、ランバースとの国境に近いカルデラ地方では陥落した城に民衆が立て籠もり、物流の大動脈であるアッピア街道やセキ峠が封鎖されると、人や物の移動が阻害されて経済活動にも深刻な影響がでた。反乱勢力の中にはトリギスティリアから傭兵や冒険者を雇って戦力を強化する動きもみられ、アデルハイムの混乱は増すばかりであった。

　この惨状に、動員されたアデルハイム軍の動きは稚拙を極めた。ランバースとの戦争で有能な指揮官をことごとく失ったアデルハイム軍は、経験の少ない若輩者たちによって率いられていたため、右往左往した挙げ句、場当たり的な対応に終始した結果、すべての対応が裏目に出てしまい、民衆の怒りに油を注ぎ続ける結果になってしまったからである。

　このような場合、普通は国王が先頭に立って対応にあたるものだが、国王のルカルオ三世は彼ら以上に役に立たなかった。

　今年で満六〇になるルカルオ三世には、王子と王女のふたりの子どもがおり、特に王子のアレクセイには後継者として強い期待を寄せていた。アレクセイは少し気の弱いところがあったが、文武の才能が豊かで仲間からの人望も厚く、特にアデルハイムが誇る五人の将軍たちからも高い評価を受けていた。その彼に、経験を積ませようと、ランバースとの戦争に赴かせたことが悲劇を招く。

　戦地へ赴いたアレクセイ王子は、安全な軍の後方に詰めていたのだが、敵の奇襲を受け、味方が大混乱に陥るなか、火攻めの罠にはまって焼死してしまった。享年、わずか一七歳。あまりにも早すぎる死であった。

　息子の死を聞いて怒り狂ったルカルオ三世は、敵軍の司令官ディリクレアを捕らえて息子と同じ目に遭わせてやると吠え叫んだが、この王命がアデルハイム軍に混乱を招くことになる。将軍たちは王命の優先を強いられたため、焦り、得意としていた連携を欠くようになり、その隙を突かれて各個撃破されてしまったのだ。結果、ディリクレアを捕らえるどころかアデルハイム軍は連敗を重ね、有能な将軍たちは相次いで討たれ、ついには追い詰められてガルガンディア要塞まで陥されてしまったのである。

戦後、ルカルオ三世は失意の底に沈んで酒に逃避するようになり、混乱する国政を尻目に酒ばかり飲む生活を送っていた。そしてついひと月ほど前、にわかに倒れ、動けなくなってしまったのであった。

　王が倒れたことにより、政治的にも軍事的にもアデルハイムの混乱はさらに深刻なものとなっていく。そしてこの機に乗じて行動をおこしたのが、ベルザニア連合国の一角を成すザウェルハン公国だった。

ザウェルハン公国を統べる大公レザウェスは、ルカルオ三世の卒倒によってアデルハイムの混乱が極に達したと見るや八万の軍を率いて国境を突破し、村や町を焼きながら王都を目指して進軍してきた。

　国境警備隊は卵の殻を踏み潰すようにして粉砕され、場当たり的に出動したアデルハイム軍は相次いで敗れた。破竹の勢いで進撃を続けるザウェルハン軍の猛攻を目の当たりにした宮廷は大混乱に陥った。一部廷臣は財産を抱えて王都から逃げ出し、これでこの国も終わりだと思って自殺する者、レザウェスに通じて国を裏切ろうとする者が相次いだ。

　この国家存亡の危機に際して、国王の代わりに先頭に立ったのが、王女のシャルリレーゼであったのだ。

　彼女は、王女の見本を具現化したような美しく、そして魅力的な娘であった。髪は金髪、瞳は碧眼で、その容姿は王国開闢の祖アデルハイムに匹敵する美貌だといわれていた。だが、彼女の魅力的なところは、むしろ首から下にあったかもしれない。

まるで皮膚に吸い付くようにぴっちりとした服を着たその身体は、すらりと細く、スタイルが良い。だが乳房やお尻は、張りがあって肉付きがよく、平均的な水準よりも遥かに大きかった。乳房は熟れた西瓜のよいに大きく、歩くだけでゆっさゆっさと揺れ動き、安産型のお尻はムチムチして後ろから見ただけで蠱惑的だ。まさに王女に相応しい豊満な肉体の持ち主といえるが、それ以外に特筆すべきものはなかった。

シャルリレーゼの知的な能力は平凡で、剣の腕も魔法の才能も乏しく、すべてにおいて兄のアレクセイに劣ること甚だしかった。廷臣たちからは、その美貌と肉感を武器に他国に嫁ぐことでしか国に貢献できないとさえ思われていたほどである。

　だが、責任感でいえば彼女のほうが兄よりも強かったようだ。同じ年齢のとき、兄のアレクセイは敵の襲撃を受けて逃げ惑っていたが、シャルリレーゼは逃げずに立ち向かうことを選んだのだから。

　白を基調とした軍装に身を包んだシャルリレーゼは、美しい金髪を後ろで束ね、国王の代理として軍の動員を命じると、集まった将兵たちに向かって激を飛ばした。

「いま、我が国は国家存亡の危機にある。外敵を討ち、国内の混乱を収めなくてはこの国に未来はないだろう。勇敢なるアデルハイムの兵士たちよ、この国難を乗り切るためわたしに力を貸してくれ！　わたしは、この国を救いたいのだ！」

シャルリレーゼの熱弁を聞いても、将兵たちの顔はさえなかった。一部、前列にいた者が、シャルリレーゼのいやらしい身体を見て熱狂している以外は、やる気というものが感じられない。

それもそのはずだ。

軍の大半が国内の反乱勢力と対峙している最中、シャルリレーゼの元に集まった兵の数はわずか三万で、それも無理やり徴兵された市民が多分に混ざっているという有り様だったのである。統一されていない装備の質が、即席軍隊の哀れさを醸し出していた。

　一方、レザウェス大公に率いられたザウェルハン軍は、歴戦の精兵で構成された八万の軍勢である。麾下にはゲレス、ロンバトロス、ガハナ、ケストナーといった有力な武将たちもおり、この情報を入手したランバースの情報分析官は、この一戦でシャルリレーゼが大敗北を喫し、アデルハイムが国家として立ち行かなくなると予想した。

　が、その予想は大きく外れることになる。

　王女シャルリレーゼに率いられたアデルハイム軍と、大公レザウェスに率いられたザウェルハン軍は、アデルハイム南西部にあるイサクア平原に布陣した。七月三日のことである。そして翌七月四日の正午、戦いが始まったのだが、結果はなんと、ザウェルハン軍の大敗だった。

　この戦いでザウェルハン軍は、数々の不運に見舞われて終始劣勢に立たされると、まるで樹皮を削ぐように戦力を削られていき、気づいた時には将軍たちは軒並み討ち取られ、さらには大公レザウェスも戦いの最中に戦死を遂げてしまったのである。軍の中枢を失ったザウェルハン軍は大混乱に陥って壊走し、アデルハイム軍による凄惨な追撃戦の結果、這う這うの体で祖国に帰還できたザウェルハン兵はわずか五千人ほどだった。

　この勝利でアデルハイムは息を吹き返した。国王の代理として正式に認められたシャルリレーゼはすぐに国政で辣腕を振るい、国を裏切るような真似をした廷臣たちを次々と粛清すると、新たな人材を登用して体制の刷新を図った。時には意を唱える者を家族ごと処刑台に送るという強行さを発揮しながら、彼女は迅速に王国の統治体制を再構築していったのである。

　そしてシャルリレーゼは、混沌とする国内を平定するため、いまだ各地で猛威を振るい続ける反乱勢力に対して布告文を発布した。それはこれまでの彼女からは想像できないほど苛烈な文面で構成されていた。

『いまだ王国に対して反旗を翻し続ける愚か者どもに告ぐ。定めし期日までに武器を捨て投降するならば、すべての罪を不問とし、禍根を過去に帰属させ、一時の過ちを赦すこと国王の代理人として確約する。しかし、定めし期日を一秒でも過ぎたなら、一族郎党根絶やしにする覚悟でもって殲滅する。よく考え、賢く選択せよ』

人々は驚いた。これまでシャルリレーゼは、美しいだけで、典型的な王女の枠から外れない人物だと思われていたからだ。だからこそルカルオ三世も優秀な息子に期待していたのだが、国の危機に際して覚醒したのだろうか。

人々は声を潜めて囁きあった。

「シャルリレーゼ様があんな苛烈なお人だとは思わなかった。政事が悪い方向にいかなければよいが」

「噂によると、背後に何者かがついているとのことだぞ」

「その話、聞いたことがある。なんでも、遥か昔に弾圧された有神論者たちが復権を目指して力を貸しているんだとか」

「だからザウェルハン軍に勝てたのか！」

「しっ！　滅多なことを言うな。捕まって舌を切られるぞ」

「この国は、これからどうなるんだろうか･･････」

人々は国の行くすえに一抹の不安を覚えつつ、ことの成り行きを見守ることしかできなかった。

　　　　　＊

　火の無いところに煙は立たない、ということわざがあるように、疫病のように広がる噂話には、多分な真実が含まれているのはよくあることである。

　シャルリレーゼが「彼ら」と密約を結んだのは、彼女がザウェルハン軍に奇跡的な勝利を収めるひと月ほど前のことであった。

　当時、シャルリレーゼは、出口が見えないまま混沌の坩堝と化すアデルハイムの情勢を憂い、歯がゆい想いを抱きながら日々を送る毎日だった。

「このままではこの国はダメになってしまう。なんとか――なんとかしなければ･･････」

そうは思うものの、王女という肩書き以外、自分に特筆すべき才能がないことは自覚しているシャルリレーゼだった。

わかっている、わかっているのだ。剣は嗜むていどの力量しかなく、魔法の才能は皆無といってよい。頭もズバ抜けてよいわけでもなく、多額の財産をもっているわけでもない。美貌に優れているだけの顔と、無駄に豊満な肉体以外とで、周囲の人間が自分に期待していないことぐらい、わかっているのだ。

　だが、父親を含め、周囲から期待されていなくとも、シャルリレーゼにも意志はある。アデルハイムの王女として生まれてきた身として、この国をどうにかして救いたいと思う気持ちは、誰よりも強かった。

　しかし、現実的な問題として、どうすればこの国が救えるのだろうか。他国の王に嫁いで助力を得るという方法がもっとも効果的と思われるが、アデルハイムに匹敵する国力を持つ国は、ランバース帝国やベルザニア連合国以外にはなく、婚姻関係を利用されて乗っ取られる危険性が高い。

「どうすれば･･････いったいどうすればこの国が救えるのだろうか･･････」

シャルリレーゼが有神論者であったなら、両手を合わせて神に祈りを捧げていたに違いないが、生憎と、彼女は信じる神を持ち合わせてはおらず、祈りの言葉も姿勢も知らなかった。

　そのようにして悩みの日々を送っていたところ、ある日、偶然にも、彼女はとある噂を耳にする。それは地下に潜行したという有神論者たちに関する話であった。

なんでも、その噂によると、かつて弾圧された有神論者たちの末裔が、徒党を組み、長年に渡って力を蓄えて、国の混乱に乗じて蜂起を画策し、過去の復讐を果たそうとしているということであった。

　そのような話を聞けば、普通、企みを阻止しようと動くものだが、シャルリレーゼは違った。彼らを利用することで国を建て直すことを閃いたのだ。

「一歩間違えば国を売り渡す愚行になるかもしれない。けど、このままなにもしなければ、どのみちアデルハイムはおしまいよ。だったら･･････」

シャルリレーゼは噂を頼りに、蜂起を企てているという有神論者たちに接触をはかった。

これは難しい試みだと思われたが、意外にも、接触はすぐに叶った。

新月の夜、王宮の厳重な警備を搔い潜り、その人物は、シャルリレーゼの部屋に直接、現れたのである。

　侵入者は、窓際のカーテンの影から、ぬぅっと現れた。シャルリレーゼが驚いたのはいうまでもない。

「だ、誰！？　誰なの、あなた！」

　自分で接触をはかっておいて、この言い草である。しかし、相手は気にした素振りを見せなかった。

「お初にお目にかかります、王女さま。私はハイドゥと申します。あなた様の奇異なご希望を耳にしましたゆえ、こうして参上させていただきました」

彼は黒い魔法のローブをまとっており、厚いフードを頭から被っていた。そのため表情を伺い知ることはできなかったが、口元に浮かんだ薄ら笑いが、彼の非友好性を如実に表しているようだった。

　侵入者の突然の出現に、シャルリレーゼは驚きはしたものの、呼吸を整え、心を落ち着けてから、聞いた。

「あ、あなたが･･････我が国に仇なそうとしている者、ですか？」

シャルリレーゼの率直すぎる質問に対する返答は、ふてぶてしいほど正直なものであった。

「いかにも。我「ら」はあなた様の先祖に迫害を受けた教徒の末裔。積もり積もった積年の恨みを晴らすべく、まさにいま、この瞬間にも、計画を実行に移そうとしている最中でございます」

嫌みったらしくいうハイドゥ。彼の言動はまさに宣戦布告のソレであったのだが、知能指数の低さゆえか、シャルリレーゼはそのことに気づけない――気づかないまま、自分の想いを口にした。

「恨みがあるのに、わたくしのところへ来てくれたことには感謝します。さっそくですが、わたくしは、あなたたちと取り引きをしたいと思っています」

「取り引き？」

「そうです。この国を救うため、あなたたちの力を、わたくしに貸してほしいのです」

「あぁん？」

「もちろん、タダで貸してくれとはいいません。もし、父の跡を継ぎ、わたくしが女王になったあかつきには、国として正式に先祖のおこないを詫び、あなたたちが信じる神の布教をこの国で許可することを約束します。どうでしょうか？　わたくしと、取り引きをしてはいただけないでしょうか？」

「･･････」

シャルリレーゼの非現実的で愚かとしか言いようがない提案に、ハイドゥはただただ唖然とするしかないようだった。

　少し考えればわかることだが、状況を鑑みれば、そんな提案に乗る利益がどこにあるのだろうか。

かつてのアデルハイムなら、乗る価値はあったかもしれない。アデルハイムは列強の一角として君臨し、その国力は高く、治安もよく、軍隊は強く優秀で、統治も強固だった。少なくともここ百年ほどは、付け入る隙がまるでないほど、アデルハイムは強い国だったのである。

　だがその強国も、いまは見る影がないほど弱体化している。ランバースとの戦争で有力な将軍たちを相次いで失い、度重なる重税によって疲弊した民は、ついに蜂起して国内情勢は悪化の一途を辿っている。愚かな王は勝手に自滅して無力と化し、廷臣たちは右往左往するばかりで有効な一手を打つことができていない。軍隊も弱体化する一方だ。

　この千載一遇の好機に、なぜ復讐の実行ではなく、怨敵への救済の手助けをしなければならないのか。冗談で言っているならタチが悪いし、本気で言っているなら救いようがない。そしてシャルリレーゼを観察したところ、どうやら後者のようなのである。目が本気の色をしていた。

（こいつは、もしや救いようのない阿呆なのではないか？）

声には出さず、内心で口にする。内心で口にしながら、ハイドゥは閃いた。この状況を利用して、この国をさらに地獄に引きずり込む方法を思いついたのである。

　ハイドゥは厳かな口調で言った。

「･･････わかりました。いいでしょう、あなたの提案を受け入れます」

「ほ、本当ですか、それは！　ほ、本当に、受け入れてくれるのですか？」

「はい。ただし、条件があります」

「条件？」

「そうです。あなたの先祖が犯した大罪は、謝罪や布教の許可だけでは到底贖うことができません。あなたを含め、もっと広範に罪を償わなければ、その提案を受け入れることは難しい」

「では、どうすればいいのですか？　わたくしは、なにをすればいいのでしょう？」

ハイドゥは指を三本立てて見せた。

「これより三カ月後、あなたの父親であるルカルオ王が死ぬ」

「お父さまが！？　あなたたちが、殺すのですか？」

「違う。我々が手を下すのではなく、命数が尽きて死ぬのだ。そしておまえが新たな王として選出されることになるが――それまでの間、おまえは償いとして、肉体を蟲の巣として差しだしてもらう。すなわち、腸で、膀胱で、乳房で、そして子宮で、無数の魔蟲を孕み育てながら耐えて生活するんだ。それをおまえに対する罰の条件としよう」

「な、なんですって！？　そ、そんな条件――」

「拒否するならこの話は無しだ。いずれこの国を滅ぼしたあかつきには、もっと残酷な罰を与えてやるから、それが嫌ならさっさと自殺することだな」

「うっ、くうぅ･･････！」

シャルリレーゼは唇をキュッと噛みしめた。一瞬、おぞましい想像が脳裏をよぎり、吐き気がこみ上げてきた。

「嫌だ、断る！」

と叫びたい心境が、喉の先まで出かかったが、国を救いたいという使命感が恐怖と嫌悪の感情を上回った。シャルリレーゼはズボンの裾をギュッと握りしめながら懸命に拒絶の言葉を飲み込んだ。しかし、次の言葉がなかなか出てこない。

なかなか決断がつかないシャルリレーゼをを見やりながら、ハイドゥが優しげな口調で声をかけた。

「身を捧げる覚悟がないなら辞めればいい。ここだけの話だ。辞めたって、別に誰も咎めはしないさ。私もこの話を誰かにするつもりはないしな」

そう告げてから、地獄へ落とす。

「ただし、決断するなら早いほうがいいぞ。もうしばらくすればザウェルハン軍が国境を突破してこの国に攻め込んでくるから。おまえたちは気づいていないが、国境には八万の精兵が集結しているのだぞ」

「ザウェルハンが？　ど、どうして･･････！」

我々が焚きつけたのさ――とはいわず、もっともらしい台詞を口にする。

「ザウェルハンの大公レザウェスは、十五年前の戦争で父王を殺されているからな。アデルハイムの混乱を復讐の好機とみたのだろう。恨みを買う奴は大変だな、弱った時、よってたかって責められる」

「うぅ･･････」

シャルリレーゼは呻いた。呻きながら、心底悔しそうな表情を顔に浮かべる。そのそそる顔つきを眺めやりながら、ハイドゥは愉悦めいた口調で告げた。

「五日後の夜、また来る。それまでに決断するのだな。肉体を差し出して国を救うか、それともさっさと自殺するか。後者がおすすめだぞ。毒でも身投げでも苦痛は一瞬だからな。はははは」

そう笑いながら、ハイドゥは闇に溶けるようにして姿を消した。

　･･････三日後、凶報がもたらされる。ザウェルハン軍が国境を突破して村や町を焼きながら進軍を開始したというのである。宮廷内には、悲鳴に近い絶叫が相次いだ。

「ザ、ザウェルハン軍が攻めてきただと！？　な、なにかの間違いじゃないのか！？」

「たたた大公レザウェスは猛将として知られた男だぞ。率いる軍も、ベルザニア最強だと謳われている･･････！」

「お、お終いだぁ･･････、この国は、もうお終いだぁ！」

　そのように混乱する宮廷の惨状を目の当たりにして、シャルリレーゼは決断した。

　国を救うため、自分の身を捧げることを決めたのである。

　　　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。